

# 芽かきがガーベラの生育に及ぼす影響

## 1 はじめに

ガーベラは南アフリカ原産の多年草で、非常に多種多様な花形、花色を持つことが特徴的な花です（写真1）。国内の切り花生産において、キク、バラ、カーネーションについて出荷本数が多く、全国的にも主要な切り花のひとつです。中でも静岡県は、全国の

出荷本数の41%を出荷しており（※1）、ガーベラは本県における主要な花きとなっています。

当所ではこれまでに、温室内的環境（二酸化炭素、光、温湿度など）を制御することで、生産性を向上させる技術の開発や、温室内の環境が変化した際に植物体内で起こる現象などについて研究を行ってきました。



写真1 ガーベラの花

## 2 シンクソースバランスとは

近年、野菜や花き等の様々な品目で「シンクソースバランス」という言葉が注目されています。「シンク」とは光合成を行った結果、生産された糖などを貯蔵する器官（花、実など）のこと、「ソース」とは光合成を行い糖などを生産する器官（葉など）のことを指します。「シンクソースバランス」はこの両者のバランスを意味します。シンクソースバランスが適切でないと、収穫物である花や実の数が減少したり、品質が低下することがあります。そのため、トマトやイチゴ等では摘葉や摘果といった管理によって適切なシンクソースバランスを保つ技術が確立されています。

## 3 芽かきとは

ガーベラにおいても、シンクソースバランスを管理するために、葉かき（摘葉）が以前から行われています。

一つ一つの切り花のボリュームが減少してしまることがあります。このため、芽を手でもぎ取つて強制的に除去し、1株あたりの芽数を制限することを芽かきと呼び、適切なシンクソースバランスに調整する技術として利用されています（写真3）。

しかしながら、芽かきの効果については、詳細が不明であったため、今回試験を行い、その効果を明らかにしました。

## 4 芽かきの試験結果

今回の試験では、特に芽数の多い「サンデイ」という品種の2年株を用

いました。4～10月に月1回5芽（慣行よりかなり強めの処理）を目標に芽かきを行つた場合と、芽かきをせずに放任とした場合のガーベラの生育を比較しました。

その結果、芽かきを行つた場合は芽かきをしない場合と比較し、商品花収穫本数が18%増加しました（図1）。なお、本結果は商品花の基準を花茎長40cm以上、花茎径4.5mm以上を満たすものとしています。

また、芽かきを行つた場合では切り花重、花径、花茎長、花茎径の增加など、切り花の全体的なボリュームの増加が見られ（図2）、このことが商品花収穫本数を増加させる最も大きな要因であると考えられました。

## 5 芽かきの注意点

試験により、芽かきにはガーベラ栽培の生産性を向上させる様々な効果があることが明らかになりましたが、今回の結果は、あくまで株あたり芽数の多い「サンデイ」で月1回5芽と

要因であると考えられました。

なお、切り花のボリュームの増加は、芽かきをしてすぐに現れます。その他にも、発生しても開花せずに枯死してしまう花芽の減少、1つ1つの葉の面積の増加、生育速度の増加等の様々な生育にとって良い影響があることが明らかとなりました。

ガーベラにおける芽かきや葉かきなどのシンクソースバランス管理に関する研究は未だ不明な点が多いものと考えられます。

ガーベラにおける芽かきを行つた中での強めの芽かきを行つた中での強度等は異なると言われており、同じ品種であつても、目標とする商品花収穫本数が確保できるようであれば、必ずしも芽かきを行う必要はないものと考えられます。

ガーベラにおける芽かきや葉かきなどのシンクソースバランス管理に関する研究は未だ不明な点が多いものと考えられます。

## 6 注釈等

\*1 参考、引用文献・農林水産省  
作物統計調査作況調査(花き)  
平成30年産花き生産出荷統計



写真3 芽かきの様子

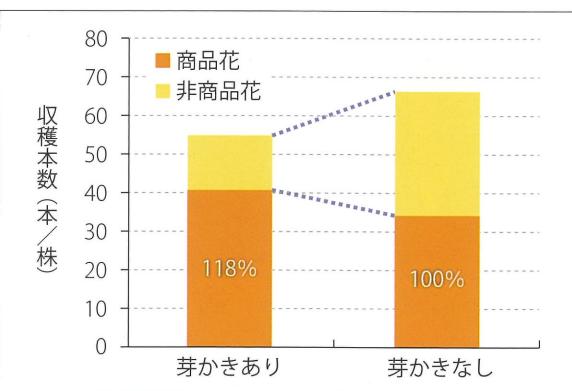


図1 商品花収穫本数の増加

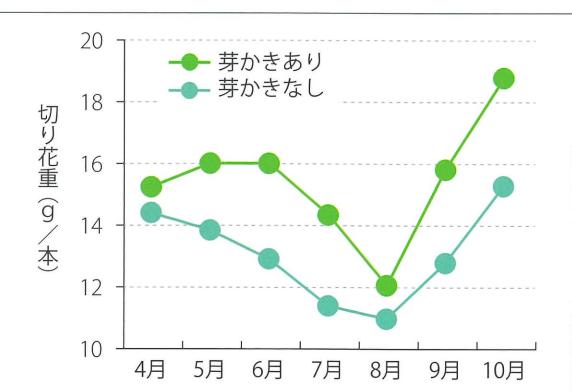


図2 切り花重の増加



写真2 ガーベラの芽(左)と株(右)

たが、それに加えて芽かきといふ作業を行つ生産者もいます。

ガーベラの1株は複数の芽（イチゴで言つクラウン）で構成されており（写真2）、芽が増えやすい一部の品種では株あたりの芽数が多く、1



静岡県農林技術研究所  
花き生産技術科 研究員  
梅田さつき

